

小泉信三賞選評

回顧と夢と、展望と

小川原 正道

(慶應義塾大学法学部教授)

小泉信三が、上皇の皇太子時代、その教育係としてともに読んだのが、サー・ハロルド・ニコルソン『ジョージ五世伝』、福澤諭吉『帝室論』、幸田露伴『運命』、志賀直哉『城の崎にて』、井上靖『蒼き狼』、川端康成『古都』などの名著であった。本は人を育て、名著は帝王を育てる。

小泉信三賞の入江論文は、そんな名著の恩恵を十分に受け止めた、重厚な論文であった。著者は、「愛」を「無限」に向かう欲動だとしつつ、現代社会においては、それがあまりにもろく薄命な存在であることを、三島由紀夫作品などを引用しながら説明し、最後に自らの劣等感、「無虚な虚構」を告白して、これを救済するものは「海」と「太陽」だとする。高校生離れした文章と、巧みな語彙の連

続が読み手をうならせる作品であった。

次席の中村論文は、平成の大きな問題のひとつは、投票率の低下であると指摘し、特に、若年層のそれが顕著であることに着目する。国民が主権者である以上、政治に他人事ではないと警鐘を鳴らし、「現実政治を重視した実感の持てる主権者教育」の実現を説く。高校生の目線に立ちながら、大胆な政策提言を行っている好論文である。

佳作三点のうち、まず小宮論文は、図書館の存在意義について正面から立ち向かった論文である。あるべき図書館の姿を海外の事例を取り上げながら模索し、さらに、司書の役割の重要性に言及し、その地位向上や司書教育の見直しを提言する。将来は編集者になりたいという著者にとって、図書館は「夢をつなぐ場所」であるという。夢と期待の詰まった論文であった。

武井論文は、平成を振り返りながら、そこで展開されてきた憲法改正論議や改正組織犯罪法、障害者郵便制度悪用事件などを丁寧な分析し、憲法や法律の改正に関する議論が重要であるにもかかわらず、固定された感情に支配され、十分な

議論が尽くされてこなかったと指摘する。その上で、国の側には丁寧な説明を、国民の側には政治への関心を求める。多様な意見の間の対話の受容性を説く、意欲的な論文である。

本問論文は、女性の社会進出という観点から平成を回顧し、大学進学と雇用という視点から、その実態を解明していく。女性の四年制大学進学率が五〇%を超えながら、東京大学では女性の割合が二〇%に及ばない現状に、著者は根強い偏見を見だし、また、女性の環境についても、待遇や賃金などは発展途上にあるとする。女性の社会進出は数字の上では進みながら、意識や実態はあまり変化していない。鋭い社会への目線を感じられる論文であった。

高校生たちは皆、平成の時代に生まれた世代であり、入選作品のうち三作品が、「平成を振り返って」をテーマとする作品となった。それは自分自身の人生、それを取り巻く環境を回顧する試みであり、これから生きていく令和の時代のあるべき姿を模索する試みでもあった。回顧と展望、そこに意欲と夢が込められた、作品たちであったといえよう。

テーマと個性

おぎの あんな
萩野 安奈

(慶應義塾大学大学院文学研究科教授)

良いテーマは、良い作品を呼んでくる。今年の場合は「ブライバシーと公共性」がそれで、犯罪の犠牲者の実名報道の是非をめぐる論考は、いずれも読み応えがあった。

マスコミの自重を求める意見が多く、取り上げる例もほぼ同じで、似たような作りとなり、何作も読んでいくうちに、記憶がごっちゃになってしまった。

結果的にこのテーマから受賞作が出ることはなかった。良い作品のその先に、個性的な作品を求める心理が選ぶ側には存在する。

個性派の代表が入江太一君の「永遠的な『愛』は捉えられるか?」。無限という抽象的なテーマと対峙するにあたって、これを愛と置き換え、理想と現実の

軋轢へと論を進める。

わずか八千字弱の内にニーチェ、プラトンから三島由紀夫まで登場し、最後はランボーの引用で閉じられる。ポーズとしての博覧強記ではなく、著者が普段から人文学系の教養を進んで身につけていることが察せられる。

独自の文体も、審査員から高評価を受けた要素の一つである。テンションの高い部分を引用してみる。

「やわい花々はほろ酔い加減の甘い香気を振り巻き、その繊細な花弁をなややかに、そしてしとやかに開いて、日夜その理解者たるミツパチとの逢瀬を待ちわびている。」

文学青年の王道を行く美文である。昔の自分を思い返して、嬉しいような恥ずかしいような、くすぐったい読後感が残った。

同様にテーマをうまく消化したのが、次作の中村祐真君。平成という時代を位置付けるに当たって、真正面から政治を論じた骨太の作品である。「若者の投票率低下について、政治家志望10代の目線で考える」とタイトルは長いが、内容の良いレジュメになっている。政治教育の

現場で求められる「中立」は、その定義が曖昧であるために機能していない、という指摘は審査員全員の共感を集めた。

武井若葉君は憲法から平成を振り返った。一方に国民の政治的無関心と安定志向があり、他方に国の多数決主義がある。憲法を巡る議論が健全化するためのヒントが、具体例を通して描かれている。先の中村君は政治家志望だが、武井君にも大志を持っていただいたいものだ。

同じ平成を、女性の社会進出の立場から論じたのが本間詩織君。ウーマンリブ世代に特有の男性へのルサンチマンが皆無で、それこそ「中立」的な、伸び伸びとした論じ方に好感が持てた。

小宮梨葉君は「自我作古」をテーマに選んだ。通常なら、この表現の定義から始まるところだが、彼女は一貫して図書館を論じ、読者は良い意味で肩透かしを食らう。人と人、人と世界を「つなぐ」存在としての図書館を提唱することが彼女なりの「自我作古」というのが結論。見事に着地している。

受賞作は、テーマと作者の個性の出会いに必然性のあるものだった。テーマ選びは自己との対話ということか。

のびのびと自由に考える 若者たちの熱気

権丈善一^{けんじょうよしかず}

(慶應義塾大学商学部教授)

三月に審査員で課題を決めたとき、五つの課題に高校生がどのように応えてくることが楽しみだ、と皆で話していた。期待以上に、そして今年は特に、みんな、のびのびと自由に考えてくれていた。

平成最後の年、そして令和元年の今年——平成の後ろ半分を生きた彼らに「平成を振り返って」という課題が出された。にもかかわらず、応募者総数の三六％と最も多くが選択し、そこから二つの佳作、武井若葉さん、本間詩織さんと、一つの次席、中村祐真君が選ばれた。

武井さんは、「憲法、法律改正議論に對する国と国民の意見の持ち方」という論文である。平成を憲法や法律のあり方について議論されることが非常に多かったと位置づけ、議論のあり方は不十分だったとみなす。ではこれらについての議

論はどうあるべきか？ 現在は過去の積み重ねであるために過去を知る必要があるとして、憲法改正議論、共謀罪を盛り込んだ改正組織犯罪法、障害者郵便制度悪用事件を考察して、満足のいく議論がなされてこなかった平成の歴史への反省の上で、政治、国民に対する要求をまとめ、令和は、「議論の過程に納得できる時代」になることを求めている。

本問さんは、「令和を心豊かな時代とするために」女性の社会進出を通して「と題する論文をまとめている。『サビエンス全史』では、「過去一世紀において社会的・文化的性別の役割は、途方もなく変革を経験した」と述べており、その変革を、日本では平成期に経験したことは確かである。そこに生きる若い筆者は、なお残る違和感を「アンコンシヤス・バイアス」というキーワードを使いながら冷静な分析を展開していく。その文章に、私は時代は確かに変わったと実感した。

次席に選ばれた中村さんの論文は「若者の投票率低下について、政治家志望10代の目線で考える」である。投票者教育のあり方をスウェーデンを例に出して説明する際に、日本における「教育の中立

性」という問題に気づいて、これを解決していく論に発展していくところはおもしろい。こういう方向での投票者教育が進んでいくと、実際の政治・政策に詳しい若者たちが増えていくことになるわけで、ただ単に投票率を上げることを言っているわけではないところが実に良い。

佳作の一つは、小宮梨菜さんの「図書館の存在意義を問う」であった。福澤が図書館制度を導入したことに着目し、読書好きの筆者が図書館について、過去・他国への視界を拓けて縦横無尽に考えていく。日本では図書館の利用者が減り、図書館への予算も減らされている。しかし……と彼女は考え、「私は、図書館の重要性を論じ、これからの図書館のあり方に一石を投じたいと思っている。……これを多くの人に読んでもらうことこそが、私なりの自我作古である」と結んでいく。

小泉賞は入江太一君の「永遠的な『愛』は捉えられるか？」が、審査員全会一致で選ばれた。無限から永遠を考え自由自在に考えを深めていく。塾高ではこういう学生が育つのかと感服。この論文、とにかく読んでもらえればと思う。

審査を終えて

須田伸一^{すだしんいち}

(慶應義塾大学経済学部教授)

今回も、多数の応募作品の中から五編の入選作品を選ぶのは大変だった。課題別にみれば、「平成を振り返って」を選んだ作品の応募が一番多かったが、平成時代に生まれ育った高校生の問題意識を反映させやすい課題だったのだろう。

さて、小泉信三賞には入江太一さんの作品が選ばれた。文学的装飾と哲学的考察を併せもつこの作品は、小論文としては異色である。しかし、「無限」と、如何にすれば我々は和解し共立しあえるか」というテーマを立て、それを「無限」の「代理物である「愛」の考察」によって突き詰めていくという方法論は、とても魅力的だった。そして何より、文学作品などからの豊富な引用を織り交ぜながら、論理を有機的に積み重ねていく構成

は、完全に「小論文的」である。その意味で、この作品は小泉信三賞にふさわしい。

次席の中村祐真さんの作品では、若者の投票率の低さの原因が若者の政治的無関心にあるとし、主権者教育の改革を求めるといった問題意識が前面に押し出されている。主張がはっきりしており、論理構成もすぐれているところが評価された。ただ、結論として示された「国が政治的中立な、かつ現場政治の内容を盛り込んだ主権者教育の教材及びガイドラインをつくる」という方策は、実現可能性が問われるであろう。この点について、スウェーデンの取り組みを参考にするなどして、より深い議論が欲しかった。

佳作作品についても順にコメントしていこう。まず小宮梨菜さんの作品であるが、課題の「自我作古」に結びつけ、図書館の利便性向上のための施策を考察している。現在の図書館制度が大きな変革の時期にあることに注目した点は高く評価したいが、内容が多岐にわたるすぎて、小論文としてのまとまりに欠けるように感じた。なお、第一章の書き方は、日本への図書館の「伝来」が戦後の

出来事であり、それも福澤諭吉が導入したように読めてしまう。注意が必要である。

つぎに武井若葉さんは、平成時代を、憲法改正議論、組織犯罪処罰法改正、そして障害者郵便制度悪用事件から振り返って考察している。この作品では、読みやすい文章で自分の意見を素直に表明している点に好感をもった。ただ、扱われた三つの論点はそれぞれ性格がまったく異なり、それを「国と国民の意見の持ち方」という切り口で強引にまとめた点に、少し無理があるように思った。

本間詩織さんの作品は、平成における女性の社会進出について、具体的な統計数字を基に考察を進めている。客観的な事実に基づく分析という点は評価できるが、それと並行して「言葉の問題」の分析にもかなりの部分が割かれており、それら二つの分析がうまく結び付けられていないように感じた。論文の構成を工夫し、「言葉の問題」と統計数値の解釈を関係づけるようにもっていけば、よりよい小論文に仕上がったのではないかな。応募者全員が、この小論文コンテストを踏み台として、より高みを目指してくれることを願っている。

小泉信三賞選評

読み手の側に立って

はやかわ ひろし
早川 浩

(株式会社早川書房代表取締役)
(社長・慶應義塾理事・評議員)

選考委員になって四年が経つが、毎回どんな論文が読めるかと心が躍る。この想いは、選考される先生方も同じであろう。

さて御代替わりして最初の小泉信三賞は、思わぬダークホースが首の差で金的を射止めた。入江さんの「永遠的な『愛』は捉えられるか？」である。選考委員の一人から推す声があり、良く考えないと確かに抗しがたい魅力がある。これまでの小泉賞と毛色は違うが、本賞の懐の深さ、私たち委員の度量の大きなところを示す選出となった、と思う。

私が何より入江さんを評価したのは、高校生ばなれた伸びやかな筆運びである。アリストテレス、プラトンから三島

由紀夫まで古今東西の文学、哲学を材に取り、「永遠の愛」を考察するその文体は術学的で、多少、気取った表現もあるが、人の心理状態を掴むのが上手いのは舌を巻いた。将来どんな仕事に就きたいのか今は知る由も無いが、文筆家を生業とするのなら潜在能力はあるし、そうでなくても、文章を書くことは是非続けてほしい。

次席の中村さんの「若者の投票率低下について、政治家志望10代の目線で考える」は、統計データと実体験の両面から説得力ある議論が展開されている。実体験の部分は自由民主党国際政治・外交論文コンテストの入賞をきっかけに得た、国会議員との交流という体験に基づいており読ませる。一方、学校教育における筆者の体験はどこまで一般化できるか多少疑問が残ったが、完成度が高い論文であることは間違いない。

佳作入選の小宮さんの「図書館の存在意義を問う」は参考文献だけでなく、実体験や図書館司書への取材によって得た情報を交えて論じている点が良い。ただし自分の興味のある「図書館」だけを、「自我作古」に繋げているところが強引で、

そこからさらなる展開が欲しかった。

武井さんの「憲法、法律改正議論に対する国と国民の意見の持ち方」は、なかなか骨太な論文である。九条を中心とした憲法改正への取り組みと、改正組織犯罪法の成立に関し、監視社会の到来が憂慮されるところの視点から、平成の振り返りに向き合う硬派な姿勢を評価する。

本間さんの「令和を心豊かな時代とするために」女性の社会進出を通して」は、平成時代の統計資料を多様に扱っている点を評価する。それ以前の時代との比較があれば、もつと平成の意味付けが明確になったであろうし、論拠・分析・主張の連携を強めることで、より明確な結論を導き出せたはずだ。

文章上達の秘訣はとにかく幾重にも名文を読むことである。言わんとすることを確認に読み手に伝えられるよう、分かり易く書くこと。書いたものが、まるでドキュメンタリー映画を見るかのようにはつきり読み手に伝わるのが肝要である。

さて、令和二年はどんな作品にめぐり逢えるか、大いに楽しみにしている。